

フランスのマイノリティにおける言語教育 ——ブレイス語のディワン学校と在仏アルメニア学校を例に——

松井真之介

はじめに——問題意識

筆者は、当研究プロジェクトにおける 2011 年 2 月の研究セミナーにおいて、『学校の設立から見るフランスのマイノリティ』という題目で、以下の 3 つの問題意識から出発した試論を提示した。その問題意識とは、

1. フランスにおいては、マイノリティの表象を押し出した学校を自主的に建設するのに、「民族」とか「郷党」という形では不可能だが、「バイリンガル教育」という形ならば可能である。それにもかかわらず、地域マイノリティと移民マイノリティの間で学校設立の動きに関して差があるのはなぜなのか。
2. そして、特に移民マイノリティの側に学校設立の目立った動きがないのはなぜなのか。
3. 今後、地域マイノリティと移民マイノリティがお互いに協働するということは考えられないのだろうか。

というものである。事例として、地域マイノリティの学校設立例としてブレイス語¹のディワン学校 (Skol Diwan)、移民マイノリティの学校設立例としてアルメニア語のアルメニア学校 (les écoles arméniennes) を取り上げ、特に学校設立に関する相違点について検討分析した。そして以下の 3 つの相違点を導き出した。

1. 彼らが話す言語が領域を持つ (地域マイノリティ) か持たない (移民マイノリティ) かという「領域性」(テリトリアリティ)の問題が非常に大きい点。現在のフランスにおいては、この領域性原則がフランスの言語であるかどうかの認知に適用されているからである。領域を持たない (非領域的) 移民の言語は、往々にして外国語とされ、フランスの言語に関する諸法の適用から外されることがほとんどである。
2. 自言語の保存・継承・実践の必要性、緊要性をどれだけ感じているかの差。つまり、守るのは自分たちしかいないか (地域語)、母国できちんと守られているか (移民) という危機感の差である。これは移民マイノリティどうしを比較してもその差は顕著である。
3. 移民マイノリティ間の相違点に関して、各移民の社会的・経済的状況の違いが非常に重要になる点。つまり、フランスにおいては私立学校が (少なくとも日本よりは) いくら安い学費とはいえ、無償ではなくなるため、例えば経済的に恵まれない環境になりがちな移民子弟に対しては必ずしも有効な学校ではないということになる²。

¹ フランスのブルターニュ地方で話されている地域語である。ブルトン語 (le breton) とも呼ばれ、こちらのほうが一般的であるが、ここではブレイス語に関して様々な論考を残している原聖、ディワン学校についての論考を残している大場静枝に従い、「ブルターニュ」の現地呼称「ブレイス」(Breizh) を使った「ブレイス語」を使用する。

² 松井真之介「学校の設立から見るフランスのマイノリティ——地域マイノリティと移民マイノリティ」神戸大学大学院国際文化学研究所 異文化研究交流センター 研究部 2010 年度プロジェクト報告書『ヨーロッパにおける多民族共存と EU——その理念、現実、表象』2011 年、pp.26-40. 参照。

本報告は、先年度の試論に基づき、2011年9月から10月にかけて実際に複数のディワン学校とアルメニア学校を訪問し、その調査結果に基づいたものである。本報告の目的は、地域マイノリティと移民マイノリティを総合的に比較し、それぞれの状況やスタンスの相違点を抽出した先年度とは反対に、マイノリティという属性を公的空間では認めないフランスにおいて、実際どのようにして独自の学校を建設し、どのようにして運営を可能にしているのかを、事例研究を元に具体的に比較分析すること、そしてそこから各言語や集団が置かれている独自の社会状況やスタンスを超えて、どのような共通点——共通する状況、共通して抱える問題点、そして共通する戦略など——を持っているかを検証することである。

その前に、本報告ではなぜ地域マイノリティの学校建設例としてブレイス語のディワン学校を、移民マイノリティの学校建設例としてアルメニア語のアルメニア学校を取り上げたのかを明らかにしておかなければならないだろう。

それは、両者ともに全日制の私立学校、自主教育学校という枠の中でバイリンガル教育熱が盛んであるということがまず挙げられる。これは同じくフランスおよびスペインの地域語であるエウシカディ語（バスク語）のイカストラ（Ikastola）も同様である。この2つの学校に比べれば数は少なくなるが、オクシタン語のカランドレータ（Calandreta）、カタラン語のブレッソーラ（Bressola）も挙げられる。その中でもディワンは、1977年に5名の生徒で幼稚園課程のみの最初の学校が設立されて以来、34年経た2011/12年の学期には、高校まで全3,528人の生徒がディワンに在籍し、41校の初等教育課程、6校の中等教育課程（コレージュ collège）、1つの高等教育課程（リセ lycée）を有するまでになっており³、77年の開校以来、年平均1.4校、5年で約7校のペースで順調に学校建設を続けている。

また、アルメニア学校を事例としたのは、ディワンと同じく全日制の私立学校の枠の中でバイリンガル教育が盛んなマイノリティ⁴であるという以上に、他の移民／非領域言語話者のマイノリティにバイリンガル学校建設の目立った動きがないという消極的選択にもよることに注目しておかなければならない。つまり、移民／非領域言語マイノリティのバイリンガル学校として、現時点ではアルメニア学校しか選択できないということである。

それでは、まず筆者が2011年9月に訪れたカンペール（Quimper）の2校と、2011年10月に訪れたパリの1校の事例を元に、ディワン学校の現状を紐解きたい。なお、本報告では地域語学校やバイリンガル学校で普段取り上げられる通史、教育内容、教育方法の話題にはあまり触れず、学校運営の現状や地域社会との関係を中心に取り上げるつもりである。

A. 地域マイノリティの事例——ブレイス語のディワン学校

A.1. 調査訪問した3校について

2011年9月にカンペールにおいて調査訪問したのは、スコール・ディワン・ケルモグ（Skol Diwan Kermoguer）⁵とスコーラシ・ディワン・ジャケズ・リウ（Skolaj Diwan Jakez Riou）⁶である。スコ

³ディワン協会のウェブサイト（<http://www.diwanbreizh.org/>、2012年2月28日確認）内のページ、「Diwan en chiffres」（<http://www.diwanbreizh.org/sections.php4?op=viewarticle&artid=25>、同日確認）参照。

⁴2012年3月現在、フランスに「アルメニア学校」と呼ぶ学校はパリ郊外に4校、マルセイユに2校、リヨン、ニースに各1校の計8校存在する。

⁵この学校については、創立当初から同校に勤務している教員マリヴォン・ベール（Marivon Berr）氏へのインタビューならびに同校提供の資料をもとにしている。

⁶この学校については、同校校長パドリグ・アン・ハバスク（Padrig an Habask）氏へのインタビューならびに同校提供の資料をもとにしている。

ール・ディワン・ケルモゲ(以下ケルモゲ校と表示)は、カンペールの北東部ケルモゲ(Kermoguer)地区にある幼稚園課程と初等教育課程をもつ学校である。1999年に開校し、現在2011/12年学期は97人の生徒が在籍している。スコーラシ・ディワン・ジャケズ・リウ校(以下ジャケズ・リウ校と表示)は、カンペールの南西部にあり、中等教育課程をもつ学校である。1997年に開校し、2011/12年学期は134人が在籍している。

2011年10月にパリにおいて調査訪問したのは、スクール・ディワン・パリズ(Skol Diwan Pariz、以下パリズ校と表示)⁷である。この学校はパリ15区にあり、幼稚園課程と初等教育課程をもつ。2004年に開校した、ブレイス語地域以外に建設された初めてのディワン学校である。同時に、地域語学校が地域語話者の歴史的分布地域の外に建設されたのも初めてであるという。2011/12年学期は47人が在籍している。

いずれの学校とも、資料収集およびインタビューを詳細に行うため、滞在している期間に複数回訪問している。

次に、各学校の具体的な内容について、学校建設、地域との関連、生徒、保護者、他校との交流について詳細に検討したい。

A.2. 学校建設について

まず、いずれの3校ともディワン協会(Association Diwan)の所有地ではなく、公有地で、賃貸物件であることに注目したい。ケルモゲ校はカンペール市とフィニステール(Finistère)県が費用を折半して学校を建設しているし、ジャケズ・リウ校、パリズ校は、もともと公立学校として使われていた建物を再利用している。賃貸料はカンペールの2校がカンペール市に、パリズ校はパリ市に払っている。

学校建設に関して、地域行政との関係にも注目するものがある。カンペールの2校は、それぞれの開校式に当時のカンペール市長と県議会議員が参列しており、パリズ校は、2度の移転のうち、1度目の移転の際にパリ市長フィリップ・ドラノエ(Philippe Delanoë)の訪問があり、その際に学校への支援を約束されている。

ディワンは私立学校のなかでも、エコール・アソシアティヴ(école associative)と呼ばれる、「各種学校」にあたる学校である。確かにフランスの国民教育省の定める国民教育プログラム(le Programme de l'Éducation Nationale)を受け入れてはいるが、「イマージョン教育」(immersion)⁸というそこから離れた比較的自由的な教育を施す自主教育学校である。よって原則的には行政の支援は期待できないことになる。それにもかかわらず、ディワンは教育委員会等の教育行政だけではなく、例えば敷地に関して地域行政からの支持を受けるなど、地域行政と密接な関連を持っていることがわかる。

A.3. 生徒数の変遷

次に生徒数の変遷について、特に近年の変遷について確認したい。これはディワン全体のデータがあるのでまずそれを参照したい。

⁷ この学校については、同校教員クルマ・マンガン・ド・カクレ(Koulma Mingam de Cacqueray)氏へのインタビューならびに同校のウェブサイト(<http://www.diwanbreizh.org/>、2012年2月26日確認)をもとにしている。

⁸ 全授業を生徒が普段使用していない言語でのみ行い、母語以外の言語能力を高める教授法である。ディワンでは6歳までは授業を全部ブレイス語のみで行い、それ以降学年が上がるにつれて徐々にフランス語を導入していく。そうして10歳の時点でフランス語とブレイス語の能力が同等になるようにカリキュラムを作っている。cf. ディワン協会のウェブサイト(<http://www.diwanbreizh.org/sections.php4?op=listarticles&secid=1>、2012年2月26日確認)および長井明日香「フランス地域語教育政策の両義性—ディワン学校公教育組み入れ問題より」『青山国際コミュニケーション研究』第6号、2002、p.33。

1977年当初は1校5名から始まったディワン学校であるが、2002年には高等教育課程まで38校、全2780人を擁するまでに至った。その後2003年には全2761人に微減するものの、2004年には全2834人と増加に転じ、2008年には44校全3076人になり、初めて3000人を突破する。2009年には初等教育課程の2校が新設され、46校全3209人、2010年には初等教育課程がさらに2校新設され、48校3361人となる。2012年現在は、学校数は2010年と変わらないものの、生徒数はさらに増加し3528人となっている⁹。

個別に見てみよう。ジャケズ・リウ校は1997年、3クラス54人で開校した。中等教育4年¹⁰のうち、第6課程（日本の小学校6年生にあたる）、第5課程（日本の中学校1年生にあたる）のみのクラス編成であった。翌年1998年には第4課程（日本の中学2年生にあたる）が新設され、新たに34人の入学者を迎え、5クラス編成となり生徒数は88人となる。1999年には第3課程（日本の中学3年生にあたる）が新設、30人の入学者を迎え、7クラス編成で生徒数全114人となる。そして2012年現在は7クラス編成全134人である¹¹。生徒数は2000年以降、年によって微減がありつつも100人を下回ることはなく、全体的には概ね右肩上がりになっているといえる。また2004年に現在の場所に移転しているが、これは将来の生徒数やクラス数の増加に対処するためだということだ。ちなみに、親の仕事の都合や離婚による生徒の転校が稀にあるということだが、それによる数の変動はあまりないという。

パリス校は、2004年の創立時には幼稚園課程の15人で開校し、2006年には25人に増加、2009年には92%の増加を見せ、42人となっている。開校から間がないせいもあるだろうが、パリス校の生徒数は急激な増加を見せているといえる。また、教室数の問題から2006年と2010年に2度の移転を経験していることから、生徒数、学年数の増加が分かるだろう。

ディワン全体および個別事例を総じて言うと、生徒数に関しては一時的な微減があるものの、全体的には順調に増加しているといえる。そしてその分、生徒数と教室数の不均衡が起こり、移転せざるを得ない例も見られることが分かる。

A.4. 生徒について

では、生徒についてはどうだろうか。焦点を生徒の入学、進路、学力の3点に絞り、引き続き3校の事例を見てみよう。

まず、生徒の入学に関して。ディワン全体のポリシーは、フランスの公立学校と同じく、「非宗教性 (laïcité)」を謳い、出自や信条による区別や差別をしない、フランスに住むすべての就学児童に開かれた学校であるとしている。つまりブレイス語話者でなくても、ブルターニュとなんの地縁血縁がなくても、さらにはフランス国籍でなくても入学できるのである。実際、2011/12年学期のケルモゲ校とパリス校では非ブルターニュ出身者の生徒が存在している。

ただ、すべての就学児童に開かれているとはいえ、ディワンでは初等教育以上の年齢では、ブレイス語はオーラルのみでなく読み書きの授業も導入される。したがって、高学年になるほどブレイス語の基礎を学んでおかないと、授業を理解するのが難しくなる。そのような理由から、コレージュであるジャケズ・リウ校は、実質ブレイス語の既習者のみを受け入れている。現在はジャケズ・リウ校生の4分の3が初等教育のディワン学校出身者、残り4分の1は公立校出身で、かつブレイス語を学んだ者で構成されている。

ジャケズ・リウ校で非常に特徴的なものが、寄宿生の存在である。2012年現在在籍する生徒134

⁹ ディワン学校ウェブサイト（前掲）および大場静枝「フランスの言語政策と地域語教育運動—ブレイス語を事例として—」『プロジェクト研究』第5号、2010年、p.7。

¹⁰ フランスでは、日本の小学校にあたる初等教育課程が5年、日本の中学校にあたる中等教育課程が4年である。

¹¹ ジャケズ・リウ校提供の資料“EMDROADUR NIVER AR SKOLAJIDI E SKOLAJ DIWAN JAKEZ RIOU”による。

人のうち半数以上の実に 80 人が寄宿生活を送っている。寄宿舎はケルフントゥン (Kerfeunteun) 地区にある、ジャケズ・リウ校の旧校舎を改造したもので、寄宿生はここに月曜晩から火曜と木曜晩から金曜の週 2 回宿泊し、現校舎に通っている。というのも、ジャケズ・リウ校はディワン全体で 6 校しかない中等教育課程のうちの 1 つであり、カンペール近隣には中等教育課程を持つディワン学校はここにしか存在しないからである。この学校で最も遠いところから来ている寄宿生は、カンペールから 40km 東にあるカンペルレ (Quimperlé) や 50km 北西にあるクロゾン (Crozon) から来ているということだ。寄宿制を取るディワン学校は何もジャケズ・リウ校だけの特徴ではなく、中等・高等教育課程の生徒の多数が寄宿生であることは大場も指摘している¹²。

生徒の進路に関しても、カンペールの 2 校では継続してディワン学校に進学する生徒が半数以上である。ケルモグ校では、生徒のほとんどがディワンのコレージュに進学し、ジャケズ・リウ校では、生徒の 3 分の 2 から 4 分の 3 がカレー=プルゲ (Carhaix-Plouguer) にあるディワン唯一のリセ、リセ・ディワン (Lycée Diwan) に進学するという。カレー=プルゲはカンペールの北東 50km に位置する人口 8,200 人程度のコミューンであり、カンペール近辺から毎日通学できる距離ではない。したがって、カレー=プルゲ付近に自宅がある学生以外は、やはりリセ進学からも続けて寄宿する生徒がほとんどである。

ディワン学校に進学しない生徒は、大半が一般のコレージュ、リセへ進学し、一部が職業学習証書 (BEP : brevet d'étude professionnelle) を取得するために職業リセへ進学している。一般課程のコレージュ、リセへ進学した生徒は、そこでもやはりブレイス語を続けて学習するという。

次に、生徒の学力に関して検討したい。ディワン創設時の懸念およびディワン創設に反対する意見の 1 つに、ディワン学校はブレイス語教育に重点をおくあまり、フランス語能力が一般の学校に比べて劣ってしまうのではないかというものがあつた。また他の教科についても同じような懸念があつた。つまり、この学校独自の教育法——イマージョン教育——への猜疑である。これに関しては、スコーラシ (コレージュ)・ディワンの全国統一学力テストの結果と、リセ・ディワンのバカロレア成功率の資料をもとに検討したい。

まず、スコーラシ・ディワンにおける学力をみてみよう。最初のディワン学校の創設から 13 年後で、ディワン学校最初のコレージュ創設から 3 年目の 1990 年、コレージュ 1 年生を対象にした学力統一テストによって、ディワン学校の教育水準がどの程度のものが明らかにされた。このテストの結果について大場が編集した表によると、数学の全国平均が 20 点満点中の 14.57 点であるのに対して、スコーラシ・ディワン学校はそれより 0.2 点高い 14.77 点であり、わずかながら全国平均を上回っている。そしてフランス語に関しては、全国平均が 10.56 点であるのに対して、スコーラシ・ディワンは 12.06 点であり、1.5 点の差をつけているのである¹³。これによって、ディワンの中等教育課程においては少なくとも一般の学校と同程度かそれ以上の水準があることが証明され、「当初から取り沙汰されていた学力の低下、とりわけ国語であるフランス語能力の低下に対する懸念が完全に払拭されたのである」¹⁴。

では、高等教育課程はどうだろうか。ディワン学校最初の高等教育課程、リセ・ディワンは 1994 年に創立された。その 3 年後の 1997 年、ディワン学校は初のバカロレア (Baccalauréat : 大学入学資格試験) を経験する。12 人が受験したが、結果は全員合格で、しかも優秀な成績で合格したのである¹⁵。2003 年以降の結果を見てみても、常に 90% 以上の合格率であり、2008 年を除いては常

¹² 大場、前掲論文、9 頁。

¹³ 大場、同論文、9 頁。

¹⁴ 大場、同論文、9 頁。

¹⁵ 大場、同論文、9 頁。

に全国上位の 10%のランクに入っている¹⁶ことが国民教育省提供のオンライン資料および、それを編集した各種資料から確認できる¹⁷。2011 年については、レンヌ学区にある 100 校のリセの中で第 4 位の成績を収めている¹⁸。

この結果からも、生徒の学力に関してはブレイス語とは無関係の一般の学校より低いどころか、むしろ常に高い成績を収めていることが分かるだろう。

A.5. 保護者について

次に、学校を実際に選ぶ立場にある保護者についてみてみよう。

ブルターニュ各地ならびにパリのディワン学校は、現在ランデルノー (Landerneau) に本部があるディワン協会が統括しているが、そもそもこの団体は一般の私立学校のように教会や企業など、何か別の組織の庇護のもとに学校を運営しているわけではなく、学校を自主運営するための独立した組織として生まれた経緯がある。したがって創立当初から運営費の大部分を保護者自身が賄わなければならなかった。しかしそれだけでは不足するので、地域住民や地域企業の寄付を募らなければならなかったが、その活動もやはり保護者自身の多大なる尽力が必要であった。このような経緯から、ディワン学校における保護者の力は非常に強くならざるを得ない。あるいは、保護者の力が強くなければディワン学校は存続し得なかったということもできよう。

保護者の存在はディワン全体のみならず、各学校レヴェルにおいても PTA の形でやはり強いといえる。例えばパリス校では保護者会 (AEP : l'Association des parents d'élèves) が幼稚園課程に関して全責任を負っているし、初等教育課程ではプログラム範囲外の教員や職員の雇用 (確保、給与、各種社会保険)、食堂運営、そして敷地や建物のメンテナンスの責任をもっている。またケルモゲ校の保護者会は、ケルモゲ校独自で開催するバザーや学園祭の責任を持つ他、寄付金とカンペール市からの補助金の管理を行なっている。

また、公立学校やカトリック系の私立学校にブレイス語のバイリンガル学級が創設されたのも、それぞれの保護者会——公立学校の保護者会がディウ・イエース (Div Yezh : ブレイス語で「2つの言語」の意味)、カトリック系私立学校のほうがディヒュン (Dihun : ブレイス語で「目覚め」の意味)——の要請によるものであるが、ディウ・イエース、ディヒュンともに、結成の起爆剤となったのがディワンの保護者会である。

では、保護者はどのようなことをディワン学校に期待しているのだろうか。保護者のモチベーションについてみてみよう。

まず確認しておかなければならないのが、「幼稚園課程から高等教育課程までブレイス語による一貫教育を提供すること」、「ブレイス語とフランス語 (breton-français) の早期バイリンガル教育をおこなうこと」、「先祖と同じ言葉で自らの歴史を学ぶ機会を与えること」¹⁹への期待は当然存在するということである。というのも、そもそもディワンが成立したのはこの目的のためであり、ブルターニュとブレイス語を基礎としたこの建学の精神は現在も変わらない。この目的に納得しているからこそ、保護者は子弟をディワンに入学させるのは言うまでもない。

¹⁶フランス国立統計経済研究所 INSEE の統計をまとめた以下のサイトで確認できる

(http://www.linternaute.com/ville/ville/lycee/22072/detail/lycee_diwan.shtml、2012年3月7日確認)。

¹⁷リセ・ディワンの2010年バカロレア結果は、国民教育省のウェブサイトで見ることができる

(http://www.education.gouv.fr/pid23934/fiche-lycee.html?etab=0292137R&annee=3&serie=GENERAL_TECHNO、2012年3月7日確認)。

¹⁸『ル・フィガロ』(Le Figaro) 紙のウェブサイトによる

(<http://www.lefigaro.fr/palmes-lycees/academie-rennes/classement2011/page-1/>、2012年3月7日確認)。

¹⁹ディワン協会のウェブサイト (<http://www.diwanbreizh.org/>、2012年2月28日確認) 内のページ、「Les Objectifs de Diwan」(<http://www.diwanbreizh.org/sections.php4?op=viewarticle&artid=23>、同日確認) 参照。

しかし、ケルモゲ校、パリス校にはブルターニュに地縁血縁のない、フランス国内の移住者および他国からの移民の子弟が存在する。彼らがディワン学校に期待することは何であろうか。それに関して保護者が言うには、総合すると「質のいい教育を受けさせたい」という理由であったと2校の学校関係者はいう。「質のいい教育」が具体的に何を指すのか。保護者が期待しているのは、イマージョンという方法を使ったバイリンガル教育の効果、少人数教育、教師による生徒への積極的な関与、そして公立学校に比した治安のよさ、という点である。これらの評価は保護者の期待であると同時に、今や学校側のセールスポイントでもあるのだ。

このように、ディワン学校の生徒の保護者は、パワー、モチベーションともに強いことが分かる。さらにディワン学校に対して、ブルターニュやブレイス語が主目的ではない、「質のいい教育を施す治安のいい私立学校」という見方が、保護者側、学校側の両者に出てきていることに注目すべきであろう。

A.6. 他校との交流

最後に、他校との交流についての事例をみてみたい。ディワン学校内部においては、年に2,3回、全コレッジとリセの学生がカレー=プルゲのリセ・ディワンに集まって学習ならびに交流会を行っているという。教師どうしても、教育法の情報交換等を行なっている。

ディワン学校以外の学校との交流はどうだろうか。今度はジャケズ・リウ校の事例を紐解いてみよう。ジャケズ・リウ校ではディワン学校と同じような自主教育学校であるエウシカディ（バスク）語のイカシトラ学校との長い交流がある。1週間の短期交換留学という形でこれまでに12回の交流を行っている。ただしこれは南バスク、つまりスペインのイカシトラ学校であり、フランス国内のイカシトラ学校でないことを付け加えておかなければならない。また、この学校はドイツのソルブ語教育者の視察も受け入れている。ソルブ語もブレイス語と同じような地域語であり、バイリンガル学校設立のモデルとして視察に来たということである。なお、近隣の学校との交流に関しては、体育の授業時に隣接するリセの体育館を借りる程度であるということだ。

このように他校との交流は、ディワン内部では定期的に行われていることが分かる。またディワン外部との交流については、少なくともジャケズ・リウ校においては、ブレイス語と同じような地域語の自主教育学校との交流があることが分かる。

B. 移民／非領土言語マイノリティの事例——在仏アルメニア学校

B.1. 調査訪問した4校

次に在仏アルメニア学校の事例に移りたい。まず、調査訪問したアルメニア学校についてであるが、2011年9月から10月の訪問時にはパリ北東部のル・ランシー（Le Raincy）市にあるテブロットアセール校（Ecole Tebrotzassère）²⁰と、パリ南西のイシー＝レ＝ムリノー（Issy-les-Moulineaux）市のハマズカイン＝タルクマンチャツ校（Ecole Hamaskaïne-Tarkmantchatz、以下タルクマンチャツ校と表記）²¹校である。本論ではこの2校に加え、2002年、2003年に、2008年に調査訪問したマ

²⁰ この学校については、2011年時の情報は同校校長ハイグ・サルキシアン（Haïg Sarkissian）氏、同校のアルメニア語教師ノラ・バルジアン＝バニキアン（Nora Baroudjian-Banikyan）氏、および同校理事長ジャンニーヌ・ヴァルタニアン（Jeannine Vartanian）氏へのインタビューならびに同校提供の資料をもとにしている。また過去の情報は2003年1月に訪問し、当時の校長シルヴァ・カラギュリアン（Sylva Karagulian）氏に行ったインタビューをもとにしている。

²¹ この学校については、当校校長のマラル・カラオグラニアン（Maral Karaoghlanian）氏ならびに同校秘書のクロディーヌ・アスラニアン（Claudine Aslanian）氏へのインタビューおよび同校提供の資料をもとにしている。

ルセイユのハマズカイン校 (Ecole Hamaskaïne)²²と、ニースのバルサミアン校 (Ecole Barsamian)²³の事例も含めて論じるつもりである。

テブロッツァセール校は 1924 年マルセイユに女子寄宿高として創立された。もともとフランスのバイリンガル教育の私立学校として建てられたわけではなかったが、その後宗旨変えし、現在では全日制、非宗教、フランス国民教育省下の共学校になっているため、本論で事例として取り上げる。幼稚園課程から中等教育課程まで持つ学校で、2011/12 年学期には 237 人が在籍している²⁴。タルクマンチャツ校は 1996 年に幼稚園課程のみで開校したが、今では初等教育課程まで持つようになり、2011/12 年学期には 80 人²⁵が在籍している。

ハマズカイン校は 1980 年創立であり、幼稚園課程から高等教育課程までを持つ学校である。ちなみに世俗校としてのアルメニア学校はここがフランスで最初であり、この学校の成功が、他のアルメニア学校建設のモチベーションの 1 つになっている。筆者が最後に調査訪問した 2007/08 年学期は 313 人が在籍していた²⁶。バルサミアン校は 1988 年創立、幼稚園課程から初等教育課程までを持つ学校である。筆者が最後に調査訪問した 2007/08 年課程には 76 人が在籍していた。

アルメニア学校全体の通史に関しては、すでに松井論文²⁷で取り上げられているので、ここでは、アルメニア学校の目的と運営について簡単にまとめておき、その後、松井論文に追補する形でアルメニア学校の最近の傾向と変化について分析検討したい。

B.2. アルメニア学校の目的と運営

まず、ここで検討する 4 校に共通する特徴として以下の点を再度確認しておきたい。それは、4 校いずれも国民教育プログラムを遂行する学校ということである。つまりアルメニア系住民のみに開かれた学校ではなく、出自や信条によって入学資格が変化しない、「一般の私立校」ということである。

では、アルメニア学校の目的について学校名と各校の校是から紐解いてみよう。ハマズカイン校、テブロッツァセール校、タルクマンチャツ校の 3 校は副称に *franco-arménienne* (「フランス語＝アルメニア語」の意味) と、具体的な特色を表す語がついている。そしてバルサミアン校、ハマズカイン校、タルクマンチャツ校には *bilingue* (ビラング:「バイリンガルの、二言語の」の意味) が副称に入っている。以上から、アルメニア学校は「アルメニア語を」教える学校ではあるが、「アルメニア系だけ」の学校でないことが分かる。

その証拠に、3 校で実際に非アルメニア系子弟の存在が確認できる。まずバルサミアン校であるが、2002 年から 2003 年の調査時は例年生徒の 25～30%が非アルメニア系子弟であり、その出自は移民出身でないフランス人、イタリア系、スペイン系、ギリシア系などさまざまであった。2008 年調査時には 10～15%に減少しているが²⁸、それでも非アルメニア系の子弟の存在が確認で

²² 2003 年、2008 年訪問。この学校についての情報は、いずれも当時の校長ノルベール・メリキアン (Norbert Mélikian) 氏へのインタビューおよび同校提供の資料をもとにしている。

²³ 2002 年、2003 年、2008 年訪問。この学校についての情報は、いずれも校長ヒルダ・バデム (Hilda Badem) 氏および『パーレーヴ・コート・ダジュール』(Parev Côte d'Azur) 誌編集長シャルル・ケシュケキアン (Charles Kechkékian) 氏へのインタビューと動向提供の資料による。ちなみに『パーレーヴ・コート・ダジュール』誌は、ニースのアルメニア系のコミュニティ誌であり、同校内に編集室を所有している。編集長ケシュケキアン氏は同校の教員ではないが、同校に常駐しており、逐一学校の動向を観察し誌面にて報告する立場にある。

²⁴ 同校提供の資料 "Progression de l'effectif de l'école" による。

²⁵ 2012 年 1 月から 82 人になるという。

²⁶ 同校提供の資料 "Tableau des Effectifs Scolaire" による。

²⁷ 松井真之介「フランスにおけるアルメニア学校の建設と運営」『フランス教育学会紀要』第 21 号、2009 年、79-93 頁。

²⁸ このウェブサイトによる 2006 年のインタビューでは 10%となっている

(http://www.armenweb.org/espaces/reflexion/dossier_31.htm、2012 年 3 月 3 日確認)。

きることには変わらない。

テブロツァセール校も 2003 年調査時には 2 人のポーランド系と 2 人のヴェトナム系の計 4 名、2011 年調査時にはレバノン系とエジプト系の両親をもつ兄弟 4 名、他数人の非アルメニア系子弟が在籍していた。彼らはいずれも近隣在住の生徒ということである。タルクマンチャツ校では、2011/12 年学期は 80 人中 12 人が非アルメニア系である。

ハマズカイン校でも原則として生徒の入学資格制限はないが、これまで非アルメニア系子弟の入学希望はなく、結果的にアルメニア系子弟のみの入学しかなかったという。興味深いことに、ハマズカイン校ではトルコから渡仏したばかりのアルメニア人子弟の入学を拒否したことが何度かあるという。この学校では 10 歳以上の生徒の編入に関してはフランス語とアルメニア語の試験を行なうことにしているが、入学を拒否された生徒はこの試験の合格基準を満たさなかったためである。テブロツァセール校でも同じような事例が確認された。トルコでは、長年の反アルメニア的政策によりトルコ語を日常語とし、フランス語はおろかアルメニア語を理解できないアルメニア人が多数存在しており、その生徒もこれまでほとんどアルメニア語を使ってこなかったという。

以上のことから、各学校の事情によって対応は異なるといえども、この 4 校はあくまでも「フランス語とアルメニア語のバイリンガル教育という特色を持つ」学校であり、「アルメニア系子弟のためだけ」の学校ではないということが分かる。

フランス国家とアルメニア学校の関係を見てみよう。注目したいのは 4 校とも積極的に国民教育プログラムと私学補助金の契約を受け入れている点である。私学補助金の契約には単純契約 (contrat simple) と協同契約 (contrat d'association) という 2 つのタイプの契約があるが、テブロツァセール校は 1988 年以降、1994 年までに準備科 (CP) から初等教育課程すべての学年で単純契約を、1996 年以降 1999 年までにコレッジ全学年が協同契約を獲得している。1981 年に開校したハマズカイン校は 1994 年に初等教育課程からコレッジまでの全学年、2008 年から 2010 年までにリセ全学年が協同契約を獲得している。1988 年に開校したバルサミアン校では 1995 年から 2002 年までに全学年の単純契約が結ばれている。1996 年開校のタルクマンチャツ校は 2005 年に全学年で協同契約が結ばれている。このことから、フランス政府は少なくとも上記のアルメニア学校 4 校に関しては、政府が望む学校運営基準を満たしており、補助金が与えられるべき私立校であると認識しているといえる。

また、政治家や教育行政関係者の頻繁な学校訪問にも注視する必要がある。開校式など校史に大きな足跡を残す式典には、その学校が所在する市の市長が訪れたりするほか、地域議会の議員や地域の教育総監は頻繁に視察のために来校している。いずれも問題対処のための視察ではないことから、この訪問は両者の良好な関係を示しているといえよう。また、パンフレットやウェブサイトなどで行政関係者の学校訪問を広くアピールしていることから、特にアルメニア学校の側がこの訪問を歓迎していることも分かる。ハマズカイン校に関しては、旧校舎の敷地をマルセイユ市から 99 年間で 20 フランという「シンボルとしての賃貸料」で借り受けていたのも両者の良好な関係を裏付けるものとなるだろう。

以上から、ここで取り上げたアルメニア学校 4 校は、アルメニア系コミュニティの成員だけに閉ざされた学校ではなく、フランス語とアルメニア語をバイリンガル教育で教えることを特徴とする、フランスのあらゆる就学児童たちに開かれた学校であると結論づけられる。

実際の経営管理については、4 校ともそれぞれ地域のアルメニア人コミュニティから選ばれた理事会組織が行なっているが、PTA 組織をはじめとする保護者の意見や活動も、学校運営に対して非常に大きな影響力を持っていることを特筆しておかなければならない。テブロツァセール校では、毎年ヴィド・グルニエ (vide grenier : 蚤の市) と呼ばれるバザーを開催したり、コンサー

トを開催したり、篤志家や企業等へ寄付を依頼したりしているが、それを担当しているのは APEET という PTA 組織である。寄付金に関しては、4,000 人程度に寄付を依頼する手紙を送付し、その結果毎年だいたい 3 万ユーロの寄付があるという。タルクマンチャツ校やバルサミアン校でも同じように、学校の運営資金確保のため、年に 2,3 回バザーを開催している。バルサミアン校やハマズカイン校では、講演会やディナー・コンサートの開催でアルメニア人コミュニティに場所を提供するとともに、その収益で運営資金の補充をしているという。いずれも各 PTA 組織が中心となって活動を展開している。

また個人レベルにおいても、筆者が訪問調査した際に保護者が頻繁に学校に出入りするものが 4 校ともに観察された。子弟の送迎のために学校に来ざるを得ないという極めて現実的な理由も大きい。それ以上に運営会議やバザー準備の打ち合わせ、バザー開催時の子弟の出し物に関する相談、授業料に関する相談等、送迎以外での訪問も頻繁であった。

その保護者たちが学校に期待していることは、やはり各学校の建学の精神となっている「アルメニア語の早期教育、アルメニア文化の伝達」および「バイリンガル教育」によるところが大きいと各校の責任者は言う。

そして、興味深いのが非アルメニア人子弟の保護者のモチベーションである。非アルメニア系子弟の保護者はバルサミアン校を選ぶ理由として、自宅からのアクセスがよい点、地区と学校の治安がよく、質のいい少人数教育への期待を挙げている。タルクマンチャツ校でも同じ意見が確認された。テブロットアセール校の非アルメニア人子弟の保護者の意見は確認できなかったが、近隣在住という点から考えると、学校へのアクセスの容易さは子弟をこの学校へ通わせる動機になっているのではないだろうか。

学校側としてもこれらの意見を学校のセールスポイントとして受け入れている。テブロットアセール校では、ウェブサイトの「教育 (pédagogie)」の項目において、9 年連続のブルヴェ (brevet : 中学修了試験) の全員合格をページトップに掲げており、アルメニア語やバイリンガル教育という個別の特徴以上に、一般の私立校としての価値を強調している²⁹。バルサミアン校の学校関係者の意見でも、バルサミアン校はそもそも入学をアルメニア系子弟のみに限っておらず、「アルメニア語が必修の家庭的な私立世俗学校」という認識を持っている。この背後には、アルメニア人コミュニティがそれほど大きくないニースではアルメニア系子弟のみでの学校運営が現実的に不可能であり、そのために一般の私立学校としての評価を上げて生徒確保に努めている背景がある。また創立初期には、バルサミアン校の教育や環境に満足できず公立校へ中途転校するという事例もあったが、現在ではそれが全く存在しないというのも、学校そのものの評価が高くなっている証拠ではないだろうか。

B.3. アルメニア学校の最近の傾向と変化

次に、アルメニア学校の最近の傾向と変化について、具体的には 2000 年以降の傾向と変化について論じたい。

まず、生徒数の変化について。タルクマンチャツ校以外の 3 校の資料によると、2000 年以降、これまで同様 3 校とも順調に増加しているが、テブロットアセール校では 2005/06 年学期の 264 人をピークに減少をはじめ、2010/11 年学期から微増に転じ、2011/12 年学期は 237 人になっている³⁰。ハマズカイン校では、2004/05 年学期の 331 人がピークで、以降微減しており、2007/08

²⁹ http://www.tebrotzassere.com/cms/index.php?option=com_content&task=blogcategory&id=5&Itemid=47、2012 年 3 月 8 日確認。ちなみに、このウェブサイトによると、2010/11 年学期ブルヴェにおけるイル・ド・フランス (Île-de-France) 県の平均成功率は 62% ということである。

³⁰ 同校提供の資料 "Progression de l'effectif de l'école" による。

年学期は 331 人となっている³¹。バルサミアン校でも 2007/08 年学期の 76 人から 2011/12 年学期まで、74 人から 77 人の間を増減しており、ここ数年は停滞している状態である。3 校ともに、2000 年代前半は順調な増加、2000 年代後半は上げ止まりが確認できる。

この共通の現象はどういうことであろうか。この現象に対して各学校の関係者は、2000 年以降アルメニア共和国や旧ソ連の諸共和国出身のアルメニア系移民が増加した影響であると考えている。そしてアルメニア共和国や旧ソ連からの移民は 2004 年から 2007 年頃を境に減少しているという。これは、アルメニア学校の生徒数の増減と一致している。

アルメニア共和国、旧ソ連からのアルメニア系移民子弟の入学によって、クラス内でも少し変化が起きている。4 校とも、アルメニア語の中でもディアスポラのアルメニア語である西アルメニア語を教える各学校であるが、アルメニア共和国および旧ソ連からのアルメニア系移民子弟が話すのは東アルメニア語である³²。そのため、生徒たちの間で 2 つのアルメニア語が話される状況が見られるという。テブロッツァセール校のアルメニア語担当教師バルジャン＝バニキアン氏によると、教育言語としては西アルメニア語を教えるが、東アルメニア語を話す生徒を矯正したりはせず、むしろどちらもアルメニア語の 1 つの形であり、1 つのアルメニア語に 2 つの読み書きの方法があるだけだ、と教えているという。

生徒数の変化に関して、学校側はどの学校も割合楽観的な観測をしている。つまり、一時の急激な生徒数増加は、旧ソ連からのアルメニア系移民の移住がその要因であったが、これがなくても生徒数は緩やかに増加しており、生徒確保に必死になる必要はないという認識である。

むしろ、漸次的な生徒数増加のためにおこる敷地や教室確保の問題を最近の傾向や変化としてあげておかなければならない。ハマズカイン校では、2003 年に新校舎が完成したが、それは旧校舎の敷地と、プレハブの増築を重ねた旧校舎では収容能力が足りなかったためである。テブロッツァセール校は幼稚園課程の増改築を検討しているのと、2007 年から現校舎の隣に、新たに高等教育課程のリセ・ネヴァルト・グルベンキアン (Lycée Nevarte Gulbenkian) を建築中であるが、敷地の使用法の問題が生じたためル・ランシー市から建築続行許可が降りず、建築途中のまま現在に至っている。

最後に、アルメニア学校間の交流や協定が盛んになってきたことが、本当にごく最近の変化としてあげられよう。まず 2011 年 8 月には、タルクマンチャツ校がレバノンのアルメニア人文化団体ハマズカイン (Hamazkayin, 仏語綴りでは Hamaskaine) と協定を結び、校名をハマズカイン＝タルクマンチャツ校と変更した。この協定締結により、タルクマンチャツ校はハマズカイン協会から資金援助のほか、アルメニア語教師のリクルート、アルメニア語教科書の提供などを受けられるようになるという。タルクマンチャツ校は学校規模の拡大を計画しており³³、協定締結はその最初の布石である。

同じく 2011 年 10 月には、パリ近郊に存在する 4 校のアルメニア学校が協定を結んでいる³⁴。学校の現状紹介や、生徒のアルメニア語能力証明の共通基準の制定計画、教員の情報交換の他、スポーツや学校訪問などによる生徒の交流を目的としたものである。また、バルサミアン校はアルメニア共和国の学校と文通による交流をしたり、アルメニア共和国にあるアルメニア・フランス

³¹同校提供の資料「Tableau des Effectifs Scolaire」による。

³²西アルメニア語はフランスをはじめ、トルコ、レバノン、ブルガリア、ルーマニア、南北アメリカなど、アルメニア人ディアスポラのコミュニティがあるところで話されている。どこの国の公用語にもなっていない。東アルメニア語はアルメニア共和国をはじめとする旧連邦内のアルメニア人と、イラン、イラクのアルメニア人コミュニティで話されており、アルメニア共和国の公用語である。東西アルメニア語は表現方法が異なるものも多いが、分かりやすい違いとして、同じ文字で違う発音をするものがあることが挙げられる。

³³ Hayrapétian, Bédros « Hamaskaine-Tarkmantchatz, un partenariat ambitieux pour un nouvel élan ! » in *France-Arménie*, numéro 376, juin 2011, pp.24-26.

³⁴ <http://www.hamaskaine-tarkmantchatz.fr/pdf/communiqu.pdf>, 2012 年 3 月 8 日確認。

大学（UFAR : Université Française en Arménie）からの研修生を受け入れ始めている。

おわりに——ディワン学校とアルメニア学校の共通点

以上の2つの事例から、いくつかの共通点が導き出される。

まず共通の特徴として、現在ではディワン学校、アルメニア学校ともに生徒数は安定期に入っているが、開校以来これまで右肩上がりに順調に増加していることが挙げられる。これに付随して、どちらも敷地や教室の確保に苦勞しているという共通の問題も忘れてはならないだろう。そしてこの問題を克服する背景に、どちらも共通して地域行政と良好な関係を築いている点も見逃してはならない。

そして今後の生徒確保について、学校側はどちらも増加もしくは安定しているだろう、と楽観的に考えている点も共通している。その理由として以下の2点があげられる。まずこれまでの経験と実績から、創立初期のような組織の脆弱さがなくなったため、安定した学校運営が可能になったこと。次に、バイリンガル教育というものが抱える一般学力の低下への不安が全くないことが証明されていること。生徒はむしろ平均より高い成績を収めており、学校側としても高い教育水準を誇れるようになっている。

学校に対して保護者の関与度が強いのも共通の特徴であろう。もともと、ディワン学校、アルメニア学校ともに保護者の強い要望によって作られ、彼らによる資金調達や生徒確保の努力など、学校維持への高いモチベーションによって拡大してきた歴史をもつ。一時期よりは緩やかになったとはいえ現在も拡大を続けているのは、この保護者のパワーやモチベーションが依然として大きく影響していることは自ずと理解できるであろう。

最後に、学校側と保護者側に共通して、これらの学校がバイリンガル教育を施す学校であると同時に、「治安がよく、教育の質がいい私立学校」という共通認識があることに注目したい。この背景には「荒れた公立学校」からの逃避という保護者の思惑がある。そして保護者からのこういった評判を、学校はセールスポイントとして使っている。これはディワン学校、アルメニア学校に共通する戦略である。本論の趣旨に沿って言い換えると、もともと地域語マイノリティや移民／非領土言語マイノリティの言語維持のためにコミュニティ内で完結していたこれらのバイリンガル学校は、今やそれだけの意義で存在しているのではなく、環境と教育の質がよい私立学校という新たな価値が付与されはじめたのである。独自の学校を建設運営するにあたり、このようなニュートラルな価値を持つことは、民族や宗教、郷党など、中間集団の公的空間への露出をコミュニティノタリズム（communitarisme : 共同体主義）として嫌うフランスにおいて、非常に重要な意味をもつのである。

<参考文献>

Abalain, Hervé : *Pleins feux sur la langue bretonne*, Coop Breizh, Spézet, 2004.

Association des Dames Arméniennes Amies des Ecoles Tebrotzassère. *120ème Anniversaire*. Association des Dames Arméniennes Amies des Ecoles Tebrotzassère, Le Raincy, 1999.

Broudic, Fañch : *L'enseignement du et en breton – Rapport à Monsieur le Recteur de l'Académie de Rennes*, Emgleo Breiz, Brest, 2011.

Broudic, Fañch : *Parler breton au XXIe siècle – Le nouveau sondage de TMO-Régions*, Emgleo Breiz, Brest, 2009.

Gouerou, C., Larvor, R. : *Diwan 1977-2007 Hiziv Aujour'd'hui*, Editions Edipaj, 2008.

Haïastan -Revue de la F.R.A. Nor Seround, numéro 538, special «"Hamaskaïne" 10ème anniversaire», Paris,

1990.

Hayrapétian, Bédros « Hamaskaïne-Tarkmantchatz, un partenariat ambitieux pour un nouvel élan ! », *France-Arménie*, numéro 376, juin 2011.

Ofis ar brezhoneg (Office de la langue bretonne) : *La langue bretonne à la croisée des chemins – Deuxième rapport général sur l'état de la langue bretonne, Observatoire de la langue bretonne 2002-2007*, Ofis ar brezhoneg (Office de la langue bretonne), Carhaix-Plouguet, 2007.

大場静枝「フランスの言語政策と地域語教育運動—ブレイス語を事例として—」『プロジェクト研究』第5号、2010年。

アンリ・ジオルダン編（原聖訳）『虐げられた言語の復権—フランスにおける少数言語の教育運動—』、批評社、1987年。

鶴巻泉子「少数言語と『新しい地域主義』をめぐって—ブレイス語の場合—」『言語文化研究叢書』第9号、2010年。

長井明日香「フランス地域語教育政策の両義性—ディワン学校公教育組み入れ問題より」『青山国際コミュニケーション研究』第6号、2002年。

フランス教育学会編『フランス教育の伝統と革新』大学教育出版、2009年

松井真之介「学校の設立から見るフランスのマイノリティ——地域マイノリティと移民マイノリティ」神戸大学大学院国際文化科学研究科 異文化研究交流センター 研究部 2010年度プロジェクト報告書『ヨーロッパにおける多民族共存とEU——その理念、現実、表象』、2011年。

松井真之介「フランスにおけるアルメニア学校の建設と運営」『フランス教育学会紀要』第21号、2009年。

ディワン協会 : <http://www.diwanbreizh.org/>

スコラシ・ディワン・ジャケズ・リウ : <http://www.skolajdiwanjakezriou.com/>

スクール・ディワン・ケルモゲ : <http://diwankemper.net/>

スクール・ディワン・パリシ : <http://www.diwanparis.org/>

テブロツァセール校 : <http://www.tebrotzassere.com/>

ハマズカイン校 : <http://www.hamaskaine-france.com/>

ハマズカイン=タルクマンチャツ校 : <http://www.hamaskaine-tarkmantchatz.fr/>